

学生 ①

「研修にて体感した歯科医師としての社会貢献の重要性」

今回のテキサス大学サンアントニオ校への海外研修において印象に残ったことは、サンアントニオのダウンタウンに存在する施設を見学したこと、そして日本とアメリカの教育体系の違いについてホストの学生と話をしたことである。

まず、見学したサンアントニオの施設についてであるが、施設の名前は「Haven for Hope」。この施設は教会などの 78 の非営利団体により、ホームレスの方たちが一時的に住むことのできる場として、仕事が見つかるよう職業訓練を行う場として、また貧しい方たちが医療行為を受けられる病院・歯科医院として、ボランティアにて運営されている。

施設内には、男性寮、女性寮、そして家族寮が存在し、子供のいる家庭では家族全員で共に住むことができた。施設の中には教育機関も存在し、中学生までの居住者は施設内で教育を受けることが可能であった。そして、高等学校以上の進学を希望する学生は、施設から学校へ通っている。実際に幼稚園を見学させて頂いたが、庭には大きな遊具が存在し、大変立派な施設であった。施設の方の説明では、この幼稚園も全て寄付金で建設されたとのことであった。この施設を見学して一番驚いたことは、施設の職員の方も居住者たちも皆とても明るいということであった。見学する前に職員の方の説明を聞いている段階では、少し暗そうなイメージを受けていたが、実際に見学すると職員の方と居住者の方々がすれ違う際に、お互いに笑顔で声を掛け合っていた。さらには、施設を利用している方々が、見学している私たちにも声をかけてきた。見学終了時には、最初に感じていた暗いイメージは完全になくなっていった。私はこの施設の見学を通して、アメリカの「裕福な人は、貧しい人を助ける責任がある」という考え方を実際に目の当たりにした。そしてこの考えは、医療行為にも通じると感じた。日本にもこのような施設が増えると良いと強く思う。

次に、日本とアメリカの歯科教育体系の大きな違いについてであるが、日本では歯科医師になるには高等学校を卒業した後に歯科大学へ 6 年間通いその後国家試験を受験する。それに対してアメリカでは高等学校を卒業した後 4 年制の大学を卒業しその間に歯科大学に行く為の必須科目を取得する。その後、歯科大学に入学し 4 年間勉強する。つまり合計で 8 年間という期間が必要である。さらに、開業するには免許の取得後に、州立試験に合格して初めて開業免許が与えられる。また、ホストの学生の話によると、広大なテキサス州に歯科大

学は3つしか存在しないとのことであり、私はこの話を聞き、彼らの歯科医師という職業に対する情熱を強く感じる事が出来た。

アメリカの歯科大生は在学中の4年時に実際の患者様への診療行為を自分の手で行うことが卒業要件となっており、われわれのホストの学生も自身で診断、治療計画の立案、治療行為などを行っていた。こうしたこともあり、彼らの知識・技術向上への学生意識は非常に高く、日本とアメリカの歯科大学の歯学教育システムの違いに関する質問や、彼ら自身の治療行為の見学に関し、その感想を求めるなど、常に勉強熱心であった。これは彼らにとって決して遠くない未来に歯科医師としていかに国民に対し貢献できるかを常に意識することが原動力になっているものと思われた。

今回の海外研修を通して、異なる文化圏の人々の考え方を目の当たりにし、また彼らと議論できたことは非常に勉強になり、刺激を受けることもできた。しかし、それ以上に今回の研修では、同じ歯科医師を目指す海外の友人を得られたということが一番大きかったのではないかと思う。彼らとの関係を本研修だけで終わりにしてしまうのではなく、生涯を通じた友人になることを願い、コミュニケーションを継続していきたい。

最後に、今回このような機会を与えてくださった大学関係者各位に感謝の意を述べるとともに、本研修プログラムの益々の発展を祈念し、稿を終えたいと思う。

学生 ②

「実践的な歯学教育システムの在り方について」

この度、私は、明海大学歯学部の特許海外研修プログラムにより、テキサス大学サンアントニオ校に派遣され、様々なことを学ぶ機会を得ることができ、特に歯学教育システムの日米の差異に関し興味深い知見を得たので以下に報告する。

テキサス大学サンアントニオ校での研修は11日に学長へのあいさつから始まり、12日、13日、15日の3日間においてホストの学生と共に講義の受講や臨床実習を行った。アメリカにおける歯学教育システムは4年制の自然科学系一般大学を卒業した後、4年制のデンタルスクールに入学し、実際の患者による臨床実習を行ったうえで、歯科医師のライセンスを取得することとなる。我々の担当となったホストの学生は2年生と4年生の2人ずつであっ

た。滞在中は、このホストである2年生あるいは4年生の学生と講義および臨床実習日程に合わせ行動を共にした。他の研修先と比べ、大学における見学および実習参加が多いことがテキサス大学サンアントニオ校への派遣の何よりも魅力である。

テキサス大学における講義時間は、午前は8時から12時、午後は1時から5時であった。2年生では主に1時間の講義のあと、その内容に準じたシミュレーション実習が夕方まで行われ、その間に休み時間はなかった。保存修復の講義を聴講し、実習に参加した感想として、講義内容の大切なところは明海大学における内容とさほど変わらない印象をうけた。ただし、大きく異なる点としては、日本では、ほとんど使われなくなったアマルガム充填が「安い」「操作性が良い」などの理由から多く用いられ、実際に実習を行っている点であった。

また、4年生では実際に患者さんを担当し、日本のようにアシスタントとしてではなく、学生主体で治療を進めていくことが大きな違いであった。もちろん指導医のインストラクターに治療の進め方や最後の確認などをしてもらうのだが、日本と比べ自分自身で患者さんの症状を把握し診断を下したのち治療方針を検討の上、実際に治療を行うことで、技術と責任という点において大きく日本の学生を引き離しているように思えた。また、1人の患者さんにかかる時間も約2時間と日本では考えられないことであった。「午前中に2人、午後には2人患者さんがいると忙しくてかなわない」と彼らは言っていたが、10人の4年生に対し衛生士は1、2名しかおらず、診療に当たる時間のみならず、ユニットの清掃や器具の準備などすべてを自分自身で行っていたことも時間がかかる理由であろう。

さらに、講義資料や臨床におけるカルテなど学内におけるさまざまなコンテンツの電子化がなされ、PCを有効利用した講義内容や患者管理など、ペーパーレス化が進んでいる点も我々と大きく違うところであった。また、実習で使う器具や材料などは、すべて無料で貸し出され学生の負担をできるだけ軽減されていた。これは学生の多くが授業料を卒業後自分自身で返済することが当たり前であり、卒業前における経済的負担への配慮がなされているためと思われる。

以上、本研修に参加することにより、日本の学生との違い、臨床の在り方の違いを実際に見ることができ大変貴重な経験となった。実際に患者さんを持つ学生たちの責任感、そのことを念頭においた勉強への積極的な姿勢に大変感銘を受けた。今回の研修は今後の学生生活、そして歯科医師になるうえで、自分自身にとって大変有益な経験であり、この経験を踏まえ、これから、より一層真剣に勉強に取り組んでいきたいと思う。

稿を終えるにあたり、この度の海外研修プログラムへの参加の機会を与えてくださった多くの大学関係者各位に感謝の意を表したい。

学生 ③

「テキサス大学サンアントニオ校における歯科医師を目指す学生の意識について」

今回、私はテキサス大学サンアントニオ校における奨学海外研修プログラムに参加し、現地の多くの学生との交流から歯科医師を目指す学生の目的意識の高さを実感することができた。

成田を出発し14時間のフライトの後、サンアントニオ空港へ到着し、バスにてホテルに向かうとホストの学生全員がすでに玄関前に待機し、温かく歓迎してくれた。ホストの学生たちはホテルに到着した瞬間から研修が終わる最後まで私たちと常に行動を共にし、初めは英語でのコミュニケーションに少し不安を感じていた部分もあったが、彼らも私の拙い英語を一生懸命聴き、わかりやすく伝えようと努力して喋ってくれたため、十分な意思の疎通が可能であった。ときには日本語を使って説明してくれる場面もあり、懸命にコミュニケーションを取ろうとしてくれたことを嬉しく感じた。ホストの学生としても、われわれ明海大学の学生1名に対し2年生と4年生の2人の学生が担当として対応し、さらに、それ以外にもアシスタントとして複数の学生が常に行動を共にしており、お互い多くのコミュニケーションを積極的に取りやすい環境であったと思う。1つの学年だけでなく2つの異なった学年の学生と会話を交わすことにより、それぞれの学年における意識や考え方の違いなどについて活発に質疑応答をする機会を得ることができ、テキサス大学サンアントニオ校における様々な学生意識について明海大学学生との比較を交え理解を深めることが出来た。

彼らとのコミュニケーションにより得られた情報の中で最も印象的に感じたことは、歯科医師を目指すことに対する彼らの目的意識の高さであった。また、彼らは卒業後の将来に関するビジョンも明確に持っており、日々それに対して真摯に努力する姿勢は同じ歯学部の学生として素晴らしいものだと感じた。彼らに、そのことを伝えると、テキサス大学サンアントニオ校の臨床実習では4年次において実際の患者様を担当患者として配当され、自分自身で診断、治療計画の立案を行い診療にあたることから、臨床実習に際し目的意識に対する真

剣さがより大きいものとなったとのことであった。一方、臨床実習を本格的に行う前である2年生においても講義の際の毎回のテストをしっかりとこなし、講義中は積極的に質問するなどしており、シミュレーション実習に関しても、実習後も自発的に夜遅くまで残り課題などの練習を行っていた。これらのことは自分や、自分の周りの明海大学の学生における目的意識との比較において、日米の歯学教育のシステムや文化の違いも含め、多くのことを考えさせられた。このような彼らと共に講義や実習に参加し、診療に付き添って患者とのコミュニケーションの取り方や、治療手技を見学することができたことはとても良い経験であったと感じている。

さらに、今回の奨学海外研修プログラムでは大学での実習や講義以外にも多くの事を経験することができた。特に印象的だったプログラムは'Heaven For Hope'と呼ばれる低所得者向けの医療施設を見学し、アメリカにおける所得格差の実態を目のあたりにすることが出来たことである。このような光景は日本では想像もできないようなものであり、この施設を見学できたことによって、多くのことを考えさせられ、今でもその光景が思い出される。

以上、短い期間ではあったが、講義、実習への参加や、自国以外の学生と歯科医学について話し合うことができたことは私にとって本当に有意義であった。帰国後もホストの学生とは連絡を取り合い、お互いの意見などを交換することができており、今回の研修は私の人生において貴重な経験になったと思う。

将来においてこの経験が活かせるよう、そしてテキサスの友人たちに負けないよう、これから日々真摯な姿勢で歯科医学、歯科医療に取り組んでいきたい。

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださり、またお手伝いしていただいた大学関係者の皆様に感謝の意を伝えたいと思います。 本当にありがとうございました。

学生 ④

「テキサス大学サンアントニオ校の学生から学んだ歯科医師を志す姿勢について」

今回、海外研修プログラムに参加させていただき、迎え入れてくれたホストの学生から、歯科医師を志す姿勢について多くを学ぶ機会を得ることができた。テキサス大学サンアントニオ校における研修に際しては2年生と4年生のホストとともに学生生活を共に過ごした。

ホストの学生たちは、非常に友好的で初日から積極的にコミュニケーションを取ることができた。英会話に関し、日常生活に支障がない程度は自分の語学力も通用したが、専門的な細かい英語の言い回しなどについて理解できないこともあり、何度か戸惑う場面もあった。世界共通言語である英語の重要性をあらためて痛感し、これを機会にさらなる英会話のスキル向上を図りたいと心に誓った。

彼らとの大学生活を共にした際に感じたこととして、どちらの学年の学生も一つ一つの講義、実習に積極的に参加しており、また、自分が疑問に思ったことを、すぐ質問していた。海外ではそれが当たり前だとよく聞くが、実際に肌で感じると学生の目的意識の高さがよくわかった。自分の日本での学生生活に置き換えてみると、講義での疑問点を解決せぬまま後日に回してしまい、本当の疑問点が曖昧になってしまうことが多い。今後は、積極的に質問していきたいと思う。

さらに、我々と同様に臨床実習参加前である2年生の学習態度について、自分との差異を客観視してみたが、彼らの学習態度には学ぶべきものが多かった。彼らは、前回の講義内容に関する小テストを講義毎に行うこともあり、その日に学習したことはその日のうちに改めて復習するということが、習慣付けられていた。自分自身の学習習慣は、講義毎の復習よりも定期テスト前の勉強への意識が強く、日々の学習機会を疎かにしているとも言える。そのため、一回、一回の講義の重要性を再認識し、講義毎に疑問点や理解不足の内容に関し、即日に理解を深めるこの勉強方法はすごく効率的だと痛感した。また、実習に関しても直近の講義にて得られた知識が定着した状態で行うことにより、講義内容を実習中にフィードバックすることも可能であり、なぜこの実習を行っているのかを、常に意識して行っていた。現在の自分は、実習を断片的な知識にて行っており、今後の実習参加においては、自分が今、どのような領域に関して学習しているのかを、強く意識し、予習復習を心がけていきたい。

また、4年生に関しては、最終学年ということで患者に関わる機会が非常に多く、テキサス大学系列の病院に連れて行ってもらった際には、学生自身が行う抜歯を見学することができた。ここでは、初診対応から治療に至るまで学生がほぼ主体となって行っていた。自分は現在5年生であるが、まだ臨床実習参加前であり、診療行為を行ったことはなく、そういう点においても、刺激になることが多かった。今後の病院実習においては、技術だけでなく、患者一人一人に対応した診断、治療計画立案に関し、根拠をしっかりと持って行えるよう学習していきたい。そして前述したように、疑問点を抽出して、指導医であるインストラクタ

一に積極的に質問していきたい。

さらに、ホストの学生や教員、医療従事者を通じ感じたことは人の温かさであった。今回の研修中に美術館を訪れた際に、そこで転倒しかけた老人に対しホストの学生全員が手を差し伸べていた。小さなことではあるが、今の日本人に欠けている大切な気持ちを学んだ気がした。加えて、今回 Haven for Hope という福祉施設を見学する機会を設けてもらった。ここでは、ホームレスや医療を受けられない人に対して、無償で医療を提供している。ここで働いている歯科医師は、すべてボランティアであり、食料なども募金によって無償で支給されていた。日本とは、全く異なる福祉施設を見学することができ、人の温かさの重要性を再認識し、歯科医師として患者と接するうえで忘れてならない大事な要件として自分の胸にいつもしっかりと置いておきたい。

最後に、今回、海外研修に参加させていただいた経験を、無駄にしないよう、自分が感じたことを日本で、明海大学でフィードバックしていきたい。学校生活のみならず、日々の生活においても率先して行い、言葉だけでなく態度で示していければと思う。そうすることが、本研修参加者としての責務であるとともに、本研修プログラムに際し、ご尽力いただいた大学関係者各位への感謝の気持ちの一端とさせていただければ幸いです。

学生 ⑤

「テキサスと日本の歯学教育および医療の相違について」

今回、テキサス大学サンアントニオ校における研修に際し、一番感じたことは日本における歯学教育との相違であった。まず、講義に関する相違としては、テキサス大学では学生全員が講義室の机の上に各自のパソコンを立ち上げ、モニター上にて映し出される講義スライドに直接メモをとり、出席や小テストに関しても、すべてパソコンを介しペーパーレスにて行っていた。日本ではプリントを用い、筆記にてメモをとる事が多いので、この講義方式はとても魅力的であった。また、日本の学生と異なり、たくさんの学生が講義途中に質問をし、講義内容に関し疑問が生じるとその場ですぐに解決していた。その結果、質問者のみならず受講者全員と教員との間において講義の進行が一方通行にならず、また講義室全体に一体感が生じ学生自身もとてもいきいきして見えた。日本人は消極的であり、講義の際に質問をす

る学生が少ないので見習いたいと思った。

次に実習では1級窩洞にアマルガムを充填する実習を行った。日本ではほとんど使われていないアマルガムも、アメリカではコストや操作性の面で優れているため頻繁に使うとのことであった。また、施術行程を実際に見るのは初めてだったこともあり、とてもいい経験になった。

臨床見学では4年生が実際に患者さんを治療するところを間近で見学することができた。学生は朝早くに登校し、まず、各自それぞれの担当する診療台の場所にて、その日の診療の事前準備を入念に行っていた。その後、患者さんを治療する際には治療行程のワンステップ毎に担当のインストラクターのチェックを受け、治療をすすめていくというシステムであった。また、その患者さんのさまざまな情報(血圧や治療状況など)はすべてパソコンに入力する事で管理されており、インストラクターがいつでもチェックできるようになっていた。このように、学生自身がある程度自立して診療にあたっている点に関しては日本と大きく異なり、実践的な臨床実習であると感じた。また、学生が治療した場合治療費を低く設定することができる点も、臨床実習のための患者確保に与える影響は大きいものと思われ、非常に興味深かった。

さらに、サンアントニオのダウンタウンにある Haven for Hope という、いわゆる低所得者のための病院の見学も行った。そこで働く歯科医師は皆、ボランティアで診療にあたっているとのことであった。この病院の見学は日本の平均的な所得層が多い文化に慣れた私にはカルチャーショックでもあったがとてもいい経験になった。現在の日本では全国のいたるところに歯科医院があり、歯科医師過剰とまで言われている。一方、テキサスでは人口の多い都市部に集中して歯科医師がおり、人口の少ないところや低所得者が多い所にはほとんど歯科医師がいないというのが今のテキサスの問題だと学生が教えてくれた。国が違くと抱える問題も様々だと思った。今後、そういった問題をどう解決していくかに注目していきたいと思う。

講義や実習、臨床の場を見学して気づいたことは、アメリカでは最先端の歯科医療を行いつつ、アマルガムや永久歯の既製冠などといった日本では既に使われていない古い技術も多様なニーズに合わせて広く使用しているということであった。また、テキサス大学の学生と話していると、しきりに日本とアメリカの文化や歯学教育および歯科医療の相違について知りたがっていた。そこで、これらの点について多くのディスカッションを重ねるうちに、我々

はお互い同じところもたくさんある中で違うところを見つけるのが楽しくなった。これからも英語学習を続け、より多くのことをディスカッションできる語学力を身につけたいと思った。さらに、テキサス大学の学生は自分の将来について明確な目標があり、自分のなりたい歯科医師像をはっきり持っていると感じた。私はまだはっきりと自分はこうなりたいという未来の歯科医師像を持ち合わせておらず、彼らを尊敬するとともに負けてはいられないと思った。

今回この研修に参加することで沢山の日本との違いを肌で感じる事ができてよかった。これから歯科医師になるうえで大変なことも増えると思うが、ホストたちに負けないよう、より一層努力をして、いい歯科医師になれるように頑張りたいと思う。

稿を終えるにあたり、この度の海外研修プログラムに際し、ご尽力いただいた大学関係者各位に感謝の意を表します。